

16

近世日本における医学の「復古」と革新・創成：  
古方派「四大家」から

向 静静

立命館大学立命館アジア・日本研究機構 専門研究員

近世日本における古方派医家が唱えた「復古」は、論者ごとに多種多様な内容を有するものであった。それは様々な中国の古典や古の医家たちを参照軸とし、そこへと復することを唱える点で共通しつつも、決して『傷寒論』への「復古」といった単線的なものではなかったと思われる。そこで本報告では、古方派の「四大家」がそれぞれに何を「復古」しようとしたのかを検討し、その意味を明らかにしたい。

古方派医家が「復古」を唱え始めたのは、近世前期の後世派医学にみられる運氣論、煩瑣・高遠な医学理論などを批判するためであった。こうした流れの始点に位置付けられる後藤良山は、庖犧・神農に「古」を求めようとし、庖犧・神農が伝えた「日用食品」をもって「未病ヲ養生」することを唱え、薬物は本質的に「毒物」だと主張した。こうした主張を通して良山が批判したのは、薬の「補益」効果ばかりを強調し、病人に薬を売りつける医家の行為である。こうした良山の薬物に対する認識は画期的なもので、のちの香川修庵・吉益東洞にも受け継がれた。

この良山のもとで医学を学んだ修庵と山脇東洋は、師の思想を継承しながら、一方でそれぞれ伊藤仁斎及び荻生徂徠らの影響を受け、彼ら自身の「古」を展開していくこととなる。良山の影響で、修庵・東洋は両者ともに民間治療法や卑近な「日用」の医療を重視した。だが両者を分けたのは、やはり「復古」の基準をどこに求めるかという点であった。修庵は儒学の師・仁斎の影響下で「儒医一本論」を唱えて、孔・孟に「医」の「古」を求めていく。にもかかわらず、彼からみたとき、その「儒医一本論」に合致する医書は存在していなかった。ゆえに彼は「自我作古」という手法を提唱し、自らこれを実践するに至る。修庵は韻書・辞書・字典などを参照しながら、文献考証学的な視点を医学研究へと持ち込み、その成果として『一本堂行余医言』『一本堂薬選』といった著作を書き上げた。強調しておきたいのは、修庵の医学が伊藤仁斎・伊藤東涯といった儒者の議論を自らの医学へと持ち込むことで、自身の「復古」を形作ったのである。

それに対して同門にあたる東洋は、修庵の「古」に同意せず、激しい批判を展開した。そもそも東洋からみれば、修庵が提唱した「儒医一本論」自体、「医」としての職分を越えるものであった。そこで、孔・孟に拠ろうとする修庵に対し、東洋は、「復古」の「三綱」を、それぞれ「周之職」としての『周礼』、「漢之術」である『傷寒論』、「晉唐之方」としての『外台秘要方』に求める。古方派四大家のうち、「復古」の対象に『傷寒論』を含めたのは東洋であり、そこに彼の革新性を見ることができる。

さて、四大家の最後にあたる東洞こそ、古方派医家の中で『傷寒論』の処方本格的に研究した嚆矢であり、古方派医学を『傷寒論』と単線的に結び付けるイメージの原因となった人物であった。言い換えれば、彼における「復古」の独自性は、『傷寒論』に対する執拗なまでのこだわりこそであった。それは、明清「錯簡重訂派」の『傷寒論』研究手法を吸収しながら、それを極端化したものだったといえよう。ところが、厳密に検証すると『傷寒論』に対して、彼は自身が好まない説を「後人之偽撰」とみなし、逆に自説と合う内容のみを「古方」「古言」として引用していたことがわかる。すなわち、彼における「復古」の作為性、恣意性は、多分に自覚的なものだったのではないかということである。つまり、彼においては、自身の主張すべき医学がある程度先にあり、『傷寒論』への傾倒も含めて「復古」は、自身の医学を究め、時にはそれを創成するための手段にすぎなかった。そしてこうした傾向は、東洞において極端にあらわれたが、実は決して彼に特有のものではなく、そもそも「復古」思想とは、単に「古」の復活にとどまらず、「革新」「創成」の面をも内包していたと分析することができる。

※本研究はJSPS 科研費21K19971の助成を受けた成果の一部である。